DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止
先輩のチンチン
小さいのってマジすか！？

大学の後輩、宇崎花が今日も
俺の部屋に遊びに来ていた。
いつものようにソファにどっかり座って、
スマホをいじりながら
「先輩～、なんかお菓子ないんすか？」とか言ってくる
いつもの調子。
俺が冷蔵庫からポテチを出してやると、
彼女はにっこり笑って受け取ったかと思うと、
急にニヤニヤした顔でこっちを見上げてきた。

「……ねえ、先輩」
「ん？　なんだよ急に」
宇崎はポテチをポリポリ食べながら、
目を細めて、まるで獲物を
値踏みするような視線を俺に突き刺す。
「先輩の友達から聞いたんすけど……
先輩のチンチン、小さいのってマジなんすか？♡」
「は！？」
一瞬、頭が真っ白になった。

「な、なんだよそれ！誰だよそんなわけねーだろ！」
慌てて否定する俺に、
宇崎はクスクスと笑いながらさらに畳み掛けてくる。
「え～、じゃあ見せてくださいよ♡」
「はぁ！？　見せるわけねーだろ！　バカか！」
「ケチ～。先輩ってほんとつまんないんすねぇ」
彼女はわざとらしく頬を膨らませてみせるけど、
その目は完全に楽しんでいる。

そして、次の瞬間、宇崎は上目遣いで、
甘ったるい声を出した。
「じゃあさ……私のおっぱい、揉ませてあげたら……
チンチン、見せてくれませんか？♡」
「……っ！」
脳が一瞬停止した。
目の前にいるのは、あの宇崎花。小柄なのに
やたら主張の強い胸。普段から
ぴっちりした服で強調しまくってる、
あの……おっぱい。

「う、うう……」

「どうしたんすか、先輩。顔真っ赤っすよ？」

「……揉んでいいのか……？」

「もちろん♡　ちょっとだけですよ～？」

もう理性が吹っ飛んでいた。

俺は震える手で、宇崎の前に両手を伸ばした。

むにゅっ♡

「……うわっ」
柔らかすぎる。
手のひらに収まりきらないほどの
ボリュームが、指の間から溢れ出す。

薄いTシャツ
越しでも伝わる、
むにゅむにゅとした
弾力がヤバい。
「10秒だけっすよ～♡
あはは♡興奮しすぎっすよ
先輩♡」
宇崎はケラケラ笑いながら、
俺の手を自分の胸に
押し付けるようにしてくる。
「……はあ、はあ……」

「この感じだともう勃起してそうっすねぇ……」
宇崎の目が、俺の股間に向かってスッと落ちる。
そして、次の瞬間――
「全部、脱がせちゃいますね……♡」
「お、おい！？　待てって！」

抵抗する間もなく、
彼女の細い指が俺の
ズボンのボタンに掛かる。
するするとベルトが
外され、ジッパーが
下ろされ、そして――
ぱさっ。
下着ごと一気に
引き下ろされた。
「……えっ」

宇崎の目が、ぱちくりと瞬く。
「……これって……♡」
彼女は一瞬固まったあと、
口元を手で押さえて、
肩を震わせ始めた。
「ぷっ……ぷぷぷっ……！」
「――！」
「やっぱ小さいじゃないですかぁ～先輩～♡」
クスクス、くすくす、と我慢しきれなく
なったように笑い声が漏れる。
「友達の話、本当だったんすね……！
あははっ♡」

俺は真っ赤になって、慌てて手を伸ばして
隠そうとしたけど、
宇崎はその手を軽く払いのけて、
目を輝かせながら顔を近づけてきた。
「隠さないでくださいよ～♡
これからもっと面白くなりそうなんすから……♡」

宇崎は俺の股間をじーっと見つめたまま、
くすくすと笑いを堪えきれずに肩を震わせている。
「先輩……これ、ほんとに小さいっすね♡」
「う、うるさい……！」
恥ずかしさで顔が熱くなる。
彼女はそう言いながら、密着してきて、
甘いシャンプーの匂いが鼻をくすぐる。
そして――宇崎の細い指が、俺のちんぽにそっと触れた。

「ひっ……！」
「うわ、ビクンってなった♡
敏感なんすね、先輩」
人差し指と中指で、
根元から先っぽまでを
なぞるようにゆっくり上下に動かす。
「くっ……やめ……」
「やめないですよ～？
だって先輩、
さっき私の胸揉んで
興奮してたじゃないですか♡
おあいこっすよね？」

宇崎はクスクス笑いながら、
今度は手のひら全体で
包み込むように握ってきた。
小さくて華奢な手が、
ゆっくりと上下にしごき始める。
しこっ……しこっ……
「ん……っ」
「どうっすか？先輩の
ちっちゃいチンポ、
こんなにピクピクしてる♡」

速度が少しずつ上がる。
先端から透明な液がにじみ出て、
宇崎の指を濡らしていく。
「うわ……もうこんなに我慢汁が♡
先輩、早漏なんすか？」
「ち、違う……！　お前が……っ」
「ふーん？　じゃあ我慢できるかな～？」
宇崎は悪戯っぽく笑って、
親指の腹で亀頭の先をぐりぐりと
円を描くように擦り始めた。
「んあっ……！
そこっ……やめっ……！」
「ここ好きなんすね♡
カリの裏側、こんなにビクビク
してる……」
彼女はもう片方の手で
俺の玉を優しく揉みながら、
手でしごく速度をさらに上げる。
ぬちゅ……ぬちゅ……という
卑猥な音が部屋に響き始める。
「先輩のちっちゃいチンポ、
すっごく熱くなってきた♡
もうイキそう？」
「う……くっ……！」

「宇崎……もう……っ」
「ふふっ、私の手で、イっちゃってください♡」
その瞬間、宇崎の手が一気に加速した。
しこしこしこしこしこっ！！
「うあっ……！　で、出るっ……！」
びゅるっ、びゅるるっ、びゅっ……！
びゅっ
びゅっ
白い飛沫が宇崎の手に、指の間から溢れ出す。
彼女はそれをじっと見つめながら、にこにこと笑った。
「わぁ……いっぱい出た♡先輩のちっちゃいチンポから、こんなに出るなんて……どんだけ興奮してるんすか♡」
俺は肩で息をしながら、ぐったりとソファに沈み込む。

宇崎は俺の射精したばかりのちんぽを、
指で軽く弾きながらにこにこと笑っていた。
「ふふ……先輩って、結構マゾっすよね♡」
「は……？」
「だって、私にこんな小さいチンポ見られて、
手でイカされちゃって……それなのに、
まだ目がトロトロしてるじゃないですか」
彼女は俺の顎を指で持ち上げて、耳元で囁く。
「もっと……気持ちいい射精、したくないですか？」
「……えっ、それって……」
「宇崎と、セックス……♡」
俺の声が震える。
宇崎は目を細めて、ゆっくり頷いた。
「そうっすよ。でも……条件があるっす…」
彼女はポケットから何かを取り出す。
黒くてツヤツヤした、小さな金属の器具。
「これ、貞操帯って言うんすけど……これ付けて、
一週間射精禁止でお願いします♡」
「ま、待てって……！」

「ダメですよ～。先輩のドロドロの濃い精液、
びゅーびゅーって出すの……
きっとすっごく気持ちいいっすよ♡
私も楽しみなんすから」

宇崎の指が俺のちんぽを優しく撫でながら、
貞操帯をカチッと装着していく。
冷たい金属が根元を締め付け、
先端を覆うカゴがぴったりとはまる。

「これで……一週間、我慢してくださいね♡
毎日、私に報告に来てくれたら……いいこと、
あるかもですよ？」

そう言って、
彼女は俺の頬にチュッとキスをして、
部屋を出て行った。

――それから一週間。
俺は地獄だった。

毎朝、朝立ちで貞操帯がキツく締め付けてくる。
授業中も、バイト中も、夜布団に入っても、
常に疼きが消えない。

宇崎からは毎日メッセージが来る。

「今日も我慢できてる？♡」

「もう限界？ かわいそ～♡」

「あと何日だっけ？ 楽しみっすね♡」

そして、ついに一週間が経った夜。

宇崎からメッセージが届く。

『今日、ラブホに来てください♡
部屋番号は後で送りますね』

心臓がバクバクしながら指定された
ラブホへ向かう。

ドアを開けると、宇崎が待っていた。

今日は黒ビキニの大胆な姿。
胸の谷間が強調されて、
俺の視線を釘付けにする。
「お疲れ様でした、先輩♡
シコシコオナニー、
一週間、
よく我慢で
きましたね」
宇崎が手をシコシコ
と上下に動かす、
その動きに合わせて
おっぱいが
たゆんたゆんと
揺れ、俺のチンポは
膨張を始める。
「宇崎……
もう、限界だ……
外してくれ……」
「ふふ、もちろん♡でも……
その前に、ちょっとだけ……
紹介したい人、いるんすよ」
「……？」

ドアがノックされる。
宇崎が立ち上がって開けると、
そこに立っていたのは――
背が高い外国人留学生。
名前はボブ君。
サークルで何度か見かけたことはあるけど、
こんなところで会うとは。
「やっほー、宇崎ちゃん♡」
ボブ君は気さくに手を振って
部屋に入ってくる。
そして、俺を見てニヤリと笑った。
「これが例の先輩？
小さいってマジなんだ？」
「うん、マジっすよ♡
見ててくださいね」

俺はベッドの上で、
手足を後ろ手に拘束されていた。
宇崎がさっき「動かないでくださいね♡」
と言って、すぐに縄で縛り上げてしまったのだ。
貞操帯もまだ外されていない。
宇崎はボブ君の前に立って、
甘えるように体を寄せる。
むにゅーん
むにむにっ♥
「ボブ君……今日は、
先輩に見せつけて
あげようと思って♡」
「へぇ、いいね。それじゃあ……」
ボブ君の大きな手が、
宇崎の胸に伸びる。
ビキニの上から、
ぐにゅっと鷲掴みにする。
「んっ……♡」
宇崎が甘い声を漏らす。

俺の目の前で、彼女の柔らかいおっぱいが、形を変えて揉みしだかれている。
「宇崎のここ、ほんとデカいよな……」
「やんっ……ボブ君、激しい……♡」
次に、ボブ君は宇崎の顎を掴んで顔を上げさせ、深くキスをする。

舌を絡ませる音が、部屋に響く。
ちゅぱ……ちゅぱ……と、わざと音を立てて。
俺は拘束されたまま、ただ見ていることしかできない。

貞操帯の中が、痛いほどに締め付けられて、
ちんぽが暴れようとしている。
「ん……ふぁ……♡」
キスが終わると、宇崎は俺の方を見て、にっこり笑った。
「先輩……見てました？
ボブ君のキス、すっごく気持ちいいんすよ♡」

ボブ君が笑いながらズボンを下ろす。
現れたのは、大くて長い、欧米人らしいちんぽ。
俺のとは比べ物にならない。
宇崎はそれを両手で握って、ゆっくりしごき始める。
「先輩……見ててくださいね♡
これから、もっと……エッチなこと、
たくさん見せちゃいますから……」

彼女の目は、俺をじっと見つめながら、妖しく輝いていた。
ボブ君は宇崎の胸を揉みしだきながら、
満足げに息を吐いた。
乳首を指で軽く弾いてから、ゆっくりと手を離す。
宇崎の胸は揉みくちゃにされたせいで、
赤く火照り、汗ばんでテカテカと光っている。
「宇崎ちゃん……このおっぱい、最高だよ。
次は……これで俺の、挟んでくれない？」

ボブ君はベッドにどっかりと腰を下ろし、
ズボンを完全に脱ぎ捨てた。
すでにビンビンに勃起した太いちんぽが、
宇崎の顔の前に突き出される。
血管が浮き出て、先端からは透明な液が
糸を引いている。
宇崎は俺の方をチラリと見て、にやりと笑った。
「先輩……ちゃんと見ててくださいね♡
ボブ君のデカいチンポ、私のおっぱいで……
パイズリしちゃいますから♡」

彼女は跪いてボブ君の前に座り込み、
両手で自分の胸を寄せて持ち上げる。
ぷるんっ、と柔らかい肉が波打ち、深い谷間が出来上がる。
宇崎はゆっくりとボブ君のちんぽをその谷間に挟み込んだ。
熱い肉棒が、柔肉に沈み込んでいく。
先端が胸の間から顔を出し、根元まで完全に包み込まれる。
宇崎は両手で胸をぎゅっと押し付けて、肉棒を完全に挟み締める。
柔らかい乳房が、ちんぽの形に合わせて変形し、
谷間がぴったりと密着して、まるでオナホのように包み込む。

ボブ君が腰を軽く突き上げると、
ぬちゅ……ぬちゅ……と、汗と先走りで濡れた音が響く。
宇崎は上目遣いでボブ君を見上げながら、
ゆっくりと胸を上下に動かし始めた。
ぱふっ……ぱふっ……ぱふぱふっ……
「どうっすか？　ボブ君……私の胸、気持ちいい？♡」
「くっ……気持ちいい……宇崎の乳、柔らかすぎ……！」
俺は拘束されたまま、ただその光景を凝視する。
宇崎は俺に気づいて、にっこり笑いながら、
わざと胸を激しく動かす。

「先輩……見てます？
あはっ♡　悔しいっすか？
興奮しちゃってるんすね……このマゾ♡」
ぱちゅんっ！　ぱちゅんっ！と、
肉がぶつかる音が部屋に響き、
「もう……出そう……！宇崎……！」
「いいっすよ♡　私の胸に……
いっぱい出してください♡」

ボブ君が最後に深く突き刺すと、
びゅるるっ！　びゅるっ！　びゅるるるっ！！
大量の白濁が、宇崎の谷間から溢れ出す。
胸の間を伝って、乳房を汚し、首筋や顎まで滴り落ちる。
宇崎はそれを指で掬って、俺の方に見せつけるように
舐め取った。
「ん……濃い……♡　ボブ君の精液、すっごく熱い……」

ボブ君の射精が終わった後、宇崎は胸に飛び散った白濁を指で掬い取り、ゆっくりと舐め取っていた。
宇崎は満足げに息を吐き、ボブ君のちんぽに視線を落とす。
まだ半分勃起したままの太い肉棒は、精液と汗でべっとりと濡れている。

「ボブ君……まだこんなに硬いんすね♡
じゃあ……お掃除、してあげますね」
彼女は跪いたまま、ボブ君のちんぽに顔を近づける。
舌を伸ばして、先端に残った白い滴をチロチロと舐め取る。
ちゅぱ……ちゅぱ……と、わざと音を立てて吸い付き、
根元まで丁寧に舌を這わせていく。
「ん……♡　ボブ君の精液、濃くて……美味しい……」

宇崎の頬が凹み、唇が肉棒を包み込む。
ゆっくりと頭を前後に動かし、残った精液を
吸い出すようにフェラチオを始める。
ボブ君は低く唸りながら、宇崎の頭を優しく撫でる。
「宇崎ちゃん……上手いな……」
俺の目の前で、彼女の口がボブ君のちんぽを咥え込み、
喉の奥まで飲み込んでいく。
ぐぽっ……ぐぽっ……と卑猥な音が響き、
宇崎の唾液が糸を引いて滴り落ちる。

宇崎は俺に気づいて、ちんぽを咥えたまま
上目遣いでこっちを見る。
口の端から精液が垂れ、にやりと笑う。
「先輩……見ててくださいね♡
これから、ボブ君に……バックで、
めちゃくちゃにされちゃいますから……」

彼女はボブ君のちんぽを一旦口から離し、
四つん這いになる。
「ボブ君……来てください♡
先輩に見せつけて……私を、犯してください……」
ボブ君は立ち上がり、宇崎の腰を掴む。

太い先端を彼女の入り口に当て、ゆっくりと押し込む。
「んあっ……！　入ってくる……♡　太い……！」
ずぶずぶ……と、肉棒が奥まで沈み込んでいく。

宇崎の体がビクビク震え、背中が反る。
ボブ君は根元まで埋め込むと、すぐに腰を引いて、
強く突き刺した。

ぱんっ！　ぱんっ！　ぱんっ！
激しいピストンが始まる。

宇崎のお尻が波打ち、肉がぶつかる音が
部屋に響き渡る。

彼女の胸が前後に激しく揺れ、乳首がシーツを擦る。
「あっ……あっ……！　ボブ君……
奥っ……当たってる……♡」
宇崎は喘ぎながら、わざと俺に視線を向ける。

涙目になりながら、妖しく笑う。
「先輩……見て……♡
私、ボブ君のデカいので……イキそう……♡」
ボブ君の腰使いがさらに速くなる。
ぐちゅぐちゅと、愛液が飛び散り、
宇崎の体が前後に激しく揺さぶられる。
「もう……イく……！　ボブ君……一緒に……！」
「くっ……出る……！」
ボブ君が最後に深く突き刺すと、
びゅるるっ！　びゅるっ！　どぷっ……！
大量の精液が宇崎の奥に注ぎ込まれる。
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
ぱちゅんッ
んあぁ～♡
あぁ～♡
びくっ
びくん
びゅっ
びゅっ

彼女の体がビクビク痙攣し、絶頂に達する。
「ああっ……！熱い……♡　いっぱい……出てる……♡」
宇崎はぐったりとベッドに崩れ落ち、
満足げに息を吐く。
ボブ君のちんぽが抜けると
溢れた白濁が太ももを伝って滴り落ちる。
ぱちゅんッ
びくッ
びくん

「はぁ……はぁ……♡」
宇崎の息は荒く、肩が激しく上下している。
汗で濡れた髪が額に張り付き、頬は真っ赤に火照り、
目は虚ろに潤んで焦点が合っていない。
ん♡
あん♡
ぉぉ♡
ぉぉ♡
ぁぁ♡
あぁ♡
はぁ♡
ん♡
口元からは涎が少し垂れ、
ボブ君の精液が太ももを伝ってシーツに染みを作っている。
彼女の胸はまだ激しく波打ち、
乳首はぷっくりといやらしく腫れ上がっている…

ボブ君と宇崎の二回戦、三回戦……俺の目の前で、
何度も何度も繰り返された。
二回戦は正常位。宇崎を仰向けに押し倒し、
彼女の脚を大きく広げて、ボブ君が深く深く突き刺すたびに、
宇崎の体が跳ね上がり、甘い悲鳴が部屋に響く。
三回戦はまたバック。今度はベッドの端に手をつかせて、
激しく腰を打ち付ける。

ぱんぱんぱん！　という音が止まらず、宇崎の胸が
前後に激しく揺れ、汗と愛液と精液が飛び散る。
彼女は何度もイキ、何度も声を枯らして喘ぎ、

ボブ君……もっと……！　奥まで……♡」と懇願する。

俺は後ろ手に縛られたまま、ただ見せつけられるだけ。
理性が溶け、頭の中は白く霞んでいる。
やがて、ボブ君が最後の射精を宇崎の奥に叩き込み、
満足げに息を吐いて体を離す。

「じゃあ、俺はそろそろ帰るわ。宇崎ちゃん、またな♡」
彼は服を着て、気さくに手を振って部屋を出て行った。
ドアが閉まる音が響き、部屋に静けさが戻る。
宇崎はベッドにぐったりと横たわったまま、
しばらく息を整えていた。

汗だくの体、乱れた髪、精液で汚れた太もも……
それでも、彼女はゆっくりと体を起こし、
俺の方に這い寄ってくる。

「先輩……お疲れ様でした♡
ボブ君、帰っちゃいましたね……」
彼女は立ち上がり、シャワーを浴びて
何事もなかったように、いつもの格好へ戻った。
さっきまでの淫靡な雰囲気とは打って変わって、
いつもの大学生の後輩みたいな、普通の女の子に戻った。
でも、その目はまだ妖しく輝いている。
宇崎は俺の前に跪き、
貞操帯のカギを手に取る。
「ずっと我慢してましたよね……♡
ふふ…」
カチッ、という小さな音とともに、
貞操帯が外される。
解放された瞬間、俺のちんぽがびくんっと跳ねる。

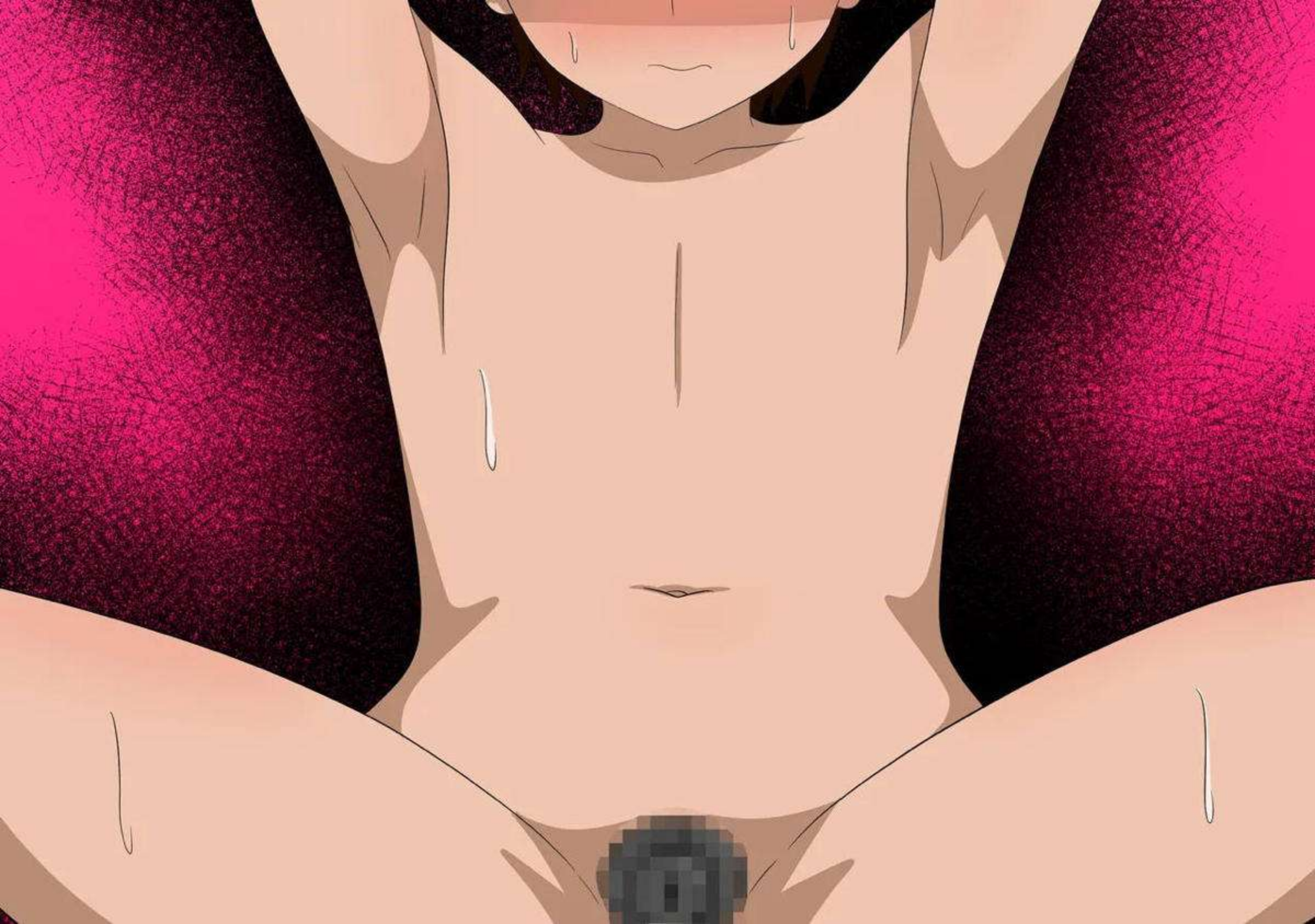
「うわ……先輩のちっちゃいチンポ、ドロドロ……」
宇崎はバッグから何かを取り出す。
それは、シリコン製のオナホールだった。
中はびっしりとヒダが刻まれ、先端部分が柔らかく開いている。
「これで……セックス、してあげますね♡」
ぶ～～～♡
ぶ～～～♡
ぐちゃ
ぐちゃ
びくっ
びくっ
彼女はオナホールを俺のちんぽに被せる。
ぬるん、と温かい感触が根元まで包み込む。
我慢したせいか、すぐにびくびくと脈打つ。
宇崎はオナホールを握って、ゆっくりと上下に動かし始める。
しこっ……しこっ……ぬちゅ……ぬちゅ……
「どうっすか？　気持ちいい？
オナホールとのセックスですけど♡」

俺はもう声も出せない。
ただ、腰が勝手に震え、息が荒くなる。
宇崎は速度を上げながら、耳元で囁く。
「先輩のちっちゃいのは、こんなオナホールで……
情けなくイっちゃうんすね♡
マゾで早漏で……くすくす……」
しこしこしこしこ！！
もう限界だった。
ふーふー♡
はーはー♡
ぴゅっ♡
ぴゅ♡
ぐちゃ
ぐちゃ
びくっ♡
びくっ♡
「う……あっ……！
で、出るっ……！」
びゅるるっ！　びゅるっ！　びゅるるるっ！！
大量の精液がオナホールの中に噴き出す。
一週間分のドロドロとした濃い白濁が、
溢れ出して宇崎の手を汚す。
俺は肩で息をしながら、ぐったりと体を沈める。

宇崎はオナホールをゆっくり抜き、
中から溢れた精液をじっくり見つめる。
「ふふ……いっぱい出ましたね♡
やっぱり私が思った通り先輩は
マゾだからこういう射精が一番気持ちいっすよね♡」
うう…宇崎い…♡
こうして俺の大学生活は宇崎にからかわれ続けるのだった…
ぶーー♡
はーー♡
びゅっ♡
びゅ♡
ぐちゃ
ぐちゃ
びくっ♡
びくっ♡

SUGOI
DEKAI

SUGOI
DEKAI

SUGOI
DAI

SUKI
DAI